

日本人学習者によるイギリス英語と アメリカ英語のリスニング

大木 俊英¹・金子 夏実¹

Japanese Learners Listening to British and American English

Toshihide O'ki¹, Natsumi Kaneko¹

Abstract

Despite the increasing importance of learners' ability to understand many English varieties, no research has compared listening comprehension of British and American English, the most dominant accents in the world, by Japanese learners. In this research, 51 Japanese university students answered a multiple-choice listening test spoken in British and American English and rated intelligibility of each accent. Although they rated American English more intelligible, their test scores on the two accents did not differ. However, test results seem to be impacted by other characteristics of test materials (i.e., passage topic, item difficulty, and speech rate) and the test format (i.e., multiple-choice). Thus, further research is necessary to make up for these limitations.

¹白鷗大学教育学部

Faculty of Education, Hakuoh University

1. 研究の背景

『English as a global language (地球語としての英語)』の著者のCrystal (2012) によれば、英語は外国語として話す者も含めれば、今や世界で20億人以上が用いているという。このうち、英語を母語 (L1) として話す人々が占めるのは3億3千万人程度で、残りは英語を第二言語 (L2) や、外国語や国際語として話す者たちだという。これは2001年の統計データに基づく推定値である。多くの新興国が経済発展を背景に人口を増やしている今日、この数は日増しに伸びているに違いない。英語の「地球語」としての地位は今後ますます確固たるものになる。日本政府は2012年に大学のグローバル化に関する閣議決定を行い、大学生の英語力の向上や海外留学の推進等を行うと発表した (文部科学省HP『資料5 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等』より)。世界を舞台に活躍できる人材の育成を目指す本学にとっても、学生の実践的な英語のスキルをいかに向上させるかは重要な課題と言えよう。

当然のことだが、相手と会話するには、相手が話す内容を正確に理解しなければならぬ。リスニングには、聞こえた音声を頭のなかで文章に置き換える「テキスト化」の段階と、テキスト化された文章をもとに内容を理解する「意味化」の段階がある (富田・小栗・河内, 2011)。文字言語を媒介とするリーディングと異なり、音声言語を通じて理解するリスニングでまず重要なのはテキスト化の能力である。Field (2008) の言葉を借りれば、「正確かつ自動的な解読 (accurate and automatic decoding)」の能力が大切で、この力は「文脈を利用する能力 (ability to make use of context)」よりも重視されるべきものである (p.136)。なぜなら、音声を正確に聞き取れないと、聞こえた言葉をもとに不確かな推測に頼って理解せざるを得なくなるからである。これは裏を返せば、聞き手が聞きとりやすい (intelligible) と感じる英語は、理解しやすいということを意味する。

しかし、英語の普及により発音が多様化し、英文を正確に聞き取るのが困難になった。したがって、実践的なリスニング力を支えるものの1つは、

多様な発音で話される英語を正確に聞き取る能力だと言える。このような力はTOEICでも測定の対象となっている。その証拠に、TOEIC公式問題集のvol.4（2009年発行）と最新版のvol.5（2012年発行）では、アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリアの4種類の発音を採用している。熟達した聞き手になるためには、様々な英語方言の発音に慣れることが重要である。

とは言え、世界の各地域の多種多様な発音を全て覚えるのは容易ではない。これに関連し金坂（2011）は、「標準英語発音を身につけていると、ネイティブや世界中のノンネイティブである英語ユーザーは、私達が何を言おうとしているのか100%理解してくれます」（p.4）と述べ、まずは標準のアメリカ英語とイギリス英語の発音に精通することを勧めている。このような標準英語の習得を推奨しようという考えは、Singlishと言われる独自の英語体系が生まれたシンガポールにおいても、2000年頃から急速に広がっているという（矢野他, 2011）。

しかし、Tara, Yanagisawa and Oshima（2010）が指摘するように、日本の中学校や高等学校の教科書が扱っているのは主にアメリカ英語の発音のようだ。標準のアメリカ英語とイギリス英語の発音には、非常に多くの特徴の違いがある^{注1}。日本は政治的にアメリカとの結びつきが強いため、アメリカ英語を中心に教える必要があるのだろうが、歴史的経緯を考えれば、世界の英語が最も影響を受けてきたのはイギリス英語だと言える（英語の広まりについては先述のCrystalの著書を参照）。イギリスとその旧植民地国を中心に構成されるイギリス連邦（The Commonwealth）は2014年2月時点で53の加盟国があり（The Commonwealth公式HPより）^{注2}、そこにはオーストラリアやインドなど世界で少なからず影響力を持つ国も含まれる。また、ヨーロッパ諸国では英語を学ぶ際、アメリカ英語ではなくイギリス英語を手本にしているということも聞いたことがある。

以上のような理由から、イギリス英語を学ぶことには多くの利点があると考えられるが、その一方で、本当にアメリカ英語とイギリス英語の発音

の違いは実際のリスニングに影響するのだろうかという疑問もある。誰もが関心を持ちそうなテーマだが、そのような研究は過去に存在しないようだ。方言による発音の違いが聴解に与える影響を調べた研究はあるが(Bent & Bradlow, 2003; Munro & Derwing, 1995)、これらは英語母語話者が聞き手となって、L2英語話者の話す英語の聞きやすさを評価した研究である。一方、Tara et al. (2010)の研究は、聞き手が日本人の英語学習者という点で著者らの関心事と一致するが、イギリス英語とヒンディー語話者が話した訛りのある英語の比較を行っている。このTara et al.の研究においては、訛りの負の影響が見られ、ヒンディー語話者の英語は聞きづらいという結果が出た。しかし、英語母語話者と非英語母語話者との比較であるため、差が出るのはある意味当然と言え、母語話者どうしの英語（イギリス英語とアメリカ英語）を比較したいという筆者らの目的とも一致しない。

以上の先行研究の分析より、イギリス英語とアメリカ英語の理解のしやすさについて、日本人の学習者を対象に行った研究の例はないことがわかった。また、発音の聞きやすさと理解のしやすさの間には関係があると考えられるが、日本人学習者が両英語をどれくらい聞きやすいと感じているか調査した例もない。したがって本研究では、日本人学習者を対象に次の3つの研究課題（Research Questions; RQs）について検証することにした。

イギリス英語とアメリカ英語を聞いたとき、

RQ1：内容理解の度合いに差はあるか？

RQ2：聞きやすさに差はあるか？

RQ3：内容理解の度合いと聞きやすさの間に相関関係はあるか？

2. 調査方法

2.1 参加者

本調査には筆者の1人が担当した2012年度の「TOEIC」の受講生、計51

名が参加した(実施日は2012年7月20日)。この講義は教育学部全専攻の2年生以上に開講されているが、英語教育専攻の学生が36名と全体の約70%を占めている。この51名の中には高校2年生5名も含まれるが、彼らは高校との連携事業で附属高校から派遣された生徒たちで、少なくとも英検準2級レベルの英語力があると判断された者たちである。この講義はTOEICでの得点アップを目標に、市販の問題集を使って進められている。問題集付属のCDにはアメリカ英語、イギリス英語の両音声収録されており、学生は授業を通じて両方の英語に触れている。

2.2 マテリアル

(1) 内容理解テスト

内容理解度を測るテストには、「TOEICテスト新公式問題集Vol.4」(Educational Testing Service, 2009)のPart 3とPart 4の問題を使用した。Part 3は2人の会話を聞き、その会話の内容について3つの設問が与えられ、それぞれについて4つの選択肢から正しいものを選ぶ形式である。Part 4はPart 3と同じく、内容に関して多肢選択式問題に答える形式だが、モノローグの説明文を聞くという点でPart 3と異なる。問題集からPart 3とPart 4で長さが同じような文章をそれぞれ4題ずつ(計8題)抜粋し、設問もそのまま使用した。Part 3、Part 4ともに4題のうち2題はアメリカ英語、残りの2題はイギリス英語で話されたものを選択した。また設問の後にはその文章の発音の聞きやすさを5段階(1:聞きづらい、2:やや聞きづらい、3:どちらでもない、4:やや聞きやすい、5:聞きやすい)で評価してもらった。内容理解テストで使用した計8つの文章の難易度は表1の通りである。

表 1. 内容理解テストで用いた英文の難易度

	トピック	文字数/語	語数/文	総語数	wpm
Part3 米 ①	ホテルの内装依頼	4.5	9.8	79	190
Part3 米 ②	電話での本予約	3.8	10.2	102	165
Part4 米 ①	病院の予約変更	4.5	16.8	84	162
Part4 米 ②	図書館設立の謝辞	4.7	14.0	112	172
	平均	4.38	12.7	94.3	172.3
Part3 英 ①	チケットの予約	4.4	10.1	91	195
Part3 英 ②	尊敬する教授	4.4	11.1	123	194
Part4 英 ①	電車のアナウンス	4.5	10.0	90	163
Part4 英 ②	人事部からの依頼	4.3	15.7	110	212
	平均	4.4	11.7	103.5	191

(2) アンケート

参加者がアメリカ英語とイギリス英語の違いを認識してこれまで学習してきたかについて調べるため、調査終了後に簡単なアンケートを実施した。このアンケートでは次の(1)と(2)の2つの質問を尋ねた。(1)では「今まで主にアメリカ英語とイギリス英語どちらを聞いて学習してきたか」を尋ね、「アメリカ英語・イギリス英語・わからない」の3択で回答してもらった。(2)では「アメリカ英語とイギリス英語どちらを好むか(または得意か)」に対し、(1)と同様に「アメリカ英語・イギリス英語・わからない」の3択で回答してもらった後、その理由を自由筆記してもらった。

2.3 手順

本調査は授業中のリスニング活動の一環として行われ、場所は普段の授業が行われている本学の一般的な教室を使用した。手順は図1に示した通りである。まず調査を始める前に同じ問題集の本番では使用しない文章を使って音量の確認を行った。用紙を配布後、回答の手順について説明し、全員が手順を理解したことを確認した後に調査を開始した。参加者はPart 3(4題)とPart 4(4題)の計8つの文章を聞いた(それぞれの文章に

は設問が3題ある)。Part 3とPart 4ともに音声は、アメリカ英語→イギリス英語→アメリカ英語→イギリス英語の順に流したが、参加者にはいずれの文章もアメリカ英語とイギリス英語どちらの音声を流しているかは知らせなかった。また各文章を聞いた後に、発音がどれくらい聞きやすかったかを先述した基準で5段階評価してもらった。最後に、調査終了後に先述したアンケートを実施した。



図1. 実験の手順 (STEP 1～8では解答後に発音の聞きやすさを評価)

2.4 採点と分析

各設問について、問題集付属の模範解答と参加者たちの答えがあていれば1点を与え、正しくなければ0点とした。アメリカ・イギリス英語ともに、Part 3 (文章2題×各3問=6点)、Part 4 (文章2題×各3問=6点)の計12点満点である。全参加者の「アメリカ英語の得点(計12点)」と「イギリス英語の得点(計12点)」の平均の差、および「アメリカ英語の聞きやすさ(5段階)」と「イギリス英語の聞きやすさ(5段階)」の平均の差について、対応のある t 検定を行った。加えて、聴解度と聞きやすさの間に関連があるか見るために、アメリカ・イギリス英語それぞれについて、合計得点と聞きやすさの間の相関分析を行った。

3章 結果と考察

3.1 内容理解テストの得点の比較 (RQ1)

表2は内容理解テストの結果の記述統計である。この表から、12点満点

中、アメリカ英語の平均は5.22、イギリス英語のそれは5.29とほぼ同じであることがわかる。 t 検定の結果、2平均の間に有意な差は見られなかった、 $t(50)=-0.23, p=.817$ 。これはアメリカ英語とイギリス英語のどちらを聞いても、内容理解に差はないことを示している。しかしPartごとに平均を見ると、Part 3ではイギリス英語が、Part 4ではアメリカ英語が高いことがわかる。この原因を明らかにするため、文章ごとに平均を調べると、文章間で差があることがわかった（図2）。そこで、どのような要因が内容理解度に影響を与えたのか、Partごとに詳しく探ることにした。

表2. 内容理解テストの記述統計 (N=51)

	Part 3	part 4	合計
アメリカ英語	2.90 [1.39]	2.31 [1.36]	5.22 [2.22]
イギリス英語	3.27 [1.48]	2.02 [1.19]	5.29 [2.13]

注 [] 内の数値は標準偏差

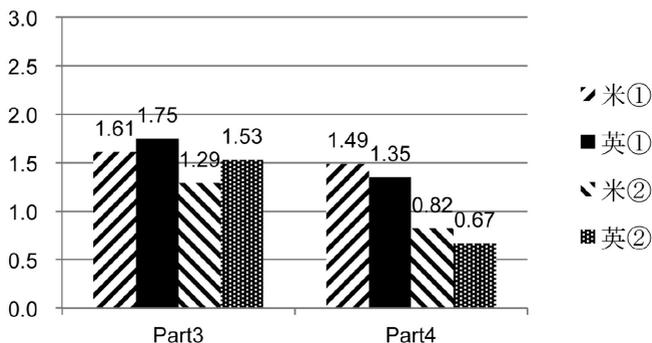


図2. 各文章の平均得点 (各文章は3点満点)

Part 3では、アメリカ英語 (2.90) よりも、イギリス英語 (3.27) のほうがわずかに全体平均が高かった。イギリス英語が高かった理由には、次の2点が考えられる。1つ目は、問題の提示順序である。本調査では各Part

とも「アメリカ英語→イギリス英語→アメリカ英語→イギリス英語」の順に文章を聞かせている(どちらの発音かは知らせていない)。イギリス英語の音声を聞く前に同じ問題形式のアメリカの音声を聞けば、問題や英語の音声への慣れが生じ、後に聞いたイギリス英語の得点が高くなる可能性がある。特に、問題にとりかかり始めて間もないPart 3は、この影響を受けやすいかもしれない。事実、Part 3では、①も②も後に聞いたイギリス英語において平均が高くなっているが(米①：英①=1.61：1.75、米②：英②=1.29：1.53)、Part 4ではそのような現象は起きていない(米①：英①=1.49：1.35、米②：英②=0.82：0.67)。

2つ目は、設問の難易度の影響である。図2を見ると、Part 3においては、イギリス英語の1題目(英①)が最も得点が高く(1.75)、アメリカ英語の2題目(米②)が最も低い(1.29)ことがわかる。2つの文章の設問ごとの成績を調べたところ、英①で正解率が高かった設問は51名中37名(対象者の73%)が正解していた。この設問は、正解の選択肢に含まれる単語(tickets)が、文章に3回も出てきているため記憶に残りやすい。一方、他の3つの選択肢で使われている単語は、本文に1度も登場しない単語が多かった。したがって、正解者の多くは、記憶に残っている単語(tickets)が選択肢に含まれているという理由だけで、たまたま正解を選べただけかもしれない。これに対し、米②で最も平均が低かった設問は、正解の選択肢(a product is not available)が文章中の表現(we don't have any more in stock right now)の言い換えになっており、当て推量で正解するのが難しくなっている。Part 3全体でみてもこの設問が最も正解者数が少なく(51名中14名;対象者の27%)、結果として、米②の全体の得点を下げる原因となったようだ。

Part4ではイギリス英語(2.02)よりも、アメリカ英語(2.31)のほうがわずかに全体の得点が高かったが、Part 3と同様、この差も発音以外の要因が強く影響したと考えた。4つの文章のうち、得点が目立って低いのは米②(0.82)と英②(0.67)である。これら2つの問題には、共通する

3つの特徴がある。1つ目は、トピックが学生にとって比較的馴染みがないことである（図書館設立の謝辞、人事部からの依頼）。2つ目は、同じPart 4の他の2つの文章に比べて、文章が長いことである。表1に示したように、米①と英①は総語数がそれぞれ84語と90語であるが、米②と英②は112語と110語である。文章が長ければ長いほど記憶に負荷を与えるので、設問への解答も難しくなると予想される。3つ目に、英文の速度も影響したと思われる。表1を見ると、米①と英①はそれぞれ162 wpmと163 wpmであるのに対して、米②と英②はそれぞれ172 wpmと212 wpmと大幅に速い。大木（2012）が指摘するように、英文の速度はリスニングに影響を及ぼす重要な要因と考えられる。

以上の分析から、発音の違いが内容理解に影響したか結論づけるためには、マテリアルとテスト形式の工夫が必要だとわかった。まずマテリアルに関しては、文章の長さ・速度・トピック難度の統制をもう少し慎重に行う必要がある。問題数を増やすことは、これらのばらつきを抑える方法の1つであるが、イギリス英語とアメリカ英語を同じ文章で聞かせるという方法もある。次にテスト形式に関して、多肢選択式以外の方法も模索せねばなるまい。Part 3の英①のように当て推量で正解できてしまう問題があったのは、多肢選択式という形式に原因がある。今回のように問題数が少ない場合、その影響は大きくなる。テストの信頼性（Cronbach's α ）が.48と低かったのも、このことに起因するかもしれない。したがって、リコールテストのように、参加者が勘で答えるのが困難な形式で内容理解度を測る必要もあろう。また、門田・野呂（2001）で紹介されている静氏考案の「群化客観確率採点方式（Clustered Objective Probability Scoring: COPS）」を用いれば、当て推量による得点の影響を抑制することもできるだろう。COPSは、各解答に対する自信レベルを受験者が高・中・低の3段階で申告し、そのレベルに応じて正解した設問の配点に変化する採点方式のことである。

3.2 発音の聞きやすさの比較 (RQ2)

発音の聞きやすさについて、アメリカ英語は平均2.85、イギリス英語は平均2.15という結果が得られ、アメリカ英語がイギリス英語を0.7上回った。2つの平均値の差を対応ありの t 検定で検討したところ、統計的に有意な差が見られた、 $t(50)=7.64, p=.000$ 。この結果から、彼らは授業を通してイギリス英語の発音にも触れているにも関わらず、アメリカ英語のほうが聞きやすいと感じていることがわかった。これは恐らく中学・高校におけるアメリカ英語偏向教育の影響によるものだろう。

この聞きやすさの結果は、先述した内容理解テストの結果と合致しないものである。すなわち、聞きやすいアメリカ英語のほうがイギリス英語よりも高得点であるべきなのに、両英語の内容理解に差はなかった。このずれが生じた主な原因は、次の3つの可能性があると考えられる。1つ目は、多肢選択式テストを用いたために参加者の能力を正確に測れなかった可能性である。2つ目は、リスニングのメカニズムに起因するものである。先述したように、発音が発音に影響するのはテキスト化の段階であるが、多肢選択式テストでは多少の英文が聞き取れなくても、文脈からの推測によって正解できてしまう場合がある。その結果、テキスト化の段階ではアメリカ英語のほうが聞きやすいと感じても、意味化を測る段階でその差が埋まってしまうこともあるだろう。これら2つの課題は、先述したように、他のテスト形式や採点方式を採用することで解決できるだろう。3つ目に、聞きやすさで勝ったアメリカ英語でも5段階中2.85と決して高い平均ではなかったことから、得点を左右するほどにアメリカ英語を聞きやすいと感じていなかったのかもしれない。いずれにしても、アメリカ英語のほうが聞きやすいと彼らを感じていることに変わりはない。したがって、大学の授業ではイギリス英語の発音を学ぶ機会をなるべく多く提供する必要があるだろう。

3.3 内容理解度と聞きやすさの関係について (RQ3)

次に、内容理解と聞きやすさの関係について見ていく。表3は両英語の合計得点と聞きやすさの相関関係を示している。興味深いことに、アメリカ英語もイギリス英語も、合計得点と聞きやすさの間に有意な相関関係は見られなかった(米 $r = .18, p = .220$; 英 $r = -.13, p = .378$)。これは、アメリカ英語かイギリス英語かに関わらず、内容理解テストで高得点を取った参加者が必ずしも聞きやすいとは感じていなかったことを意味している。さきほど内容理解テストと聞きやすさの調査の結果の間にずれがあることを指摘したが、それに一致する結果が得られたと言えよう。

表3. 得点と聞きやすさの平均の相関関係

		1	2	3	4
1.	アメリカ英語 合計得点平均	-	.39**	-.18	-.12**
2.	イギリス英語 合計得点平均		-	-.04	-.13**
3.	アメリカ英語 聞きやすさ平均			-	-.73**
4.	イギリス英語 聞きやすさ平均				-

** $p < .01$

一方、アメリカ英語の得点とイギリス英語の得点、またアメリカ英語の聞きやすさとイギリス英語の聞きやすさどうしの相関はそれぞれ有意であった(得点 = .39; 聞きやすさ = .73)。前者は、両発音の得点の仕方が似ている、すなわち片方の発音を聞いたときの得点が高ければもう片方の得点も高く、片方が低ければもう片方も低いということを表す。これは換言すれば、得点に影響を与えているのは発音の種類ではなく、学習者本来の英語力だということである。Tara et al. (2010) の研究では、発音(ヒンディー語話者とイギリス英語母語話者のもの)と熟達度の間交互作用は見られなかったことから、熟達度によって発音(訛り)の得手不得手はないという示唆が得られた。今回の結果はそれを支持する結果と言えよう。同様に、後者の結果も、片方の発音を聞きやすい(もしくは聞きづらい)と感じて

いる者は、もう片方も聴きやすい（もしくは聞きづらい）と感じていたことを表す。聞きやすさに関するt検定の結果、アメリカ英語の聞きやすさの平均が有意に高かったことから、アメリカ英語の聞きやすさを高く評価した者が多かったことがわかる。先ほど述べた通りこの原因は、日本の英語教育がアメリカ英語に偏向しているためと考えられるが、次に述べるアンケートの結果からもこのことは窺えた。

3.4 アンケートの結果

アンケート結果を集計したところ、以下の結果が得られた。(1)の「あなたは今までアメリカ英語、イギリス英語どちらを主に聞いて学習しましたか」の質問に対して、51名中47名（92%）がアメリカ英語と回答した。ここから、やはり日本の英語教育ではアメリカ英語の発音を教える傾向があることがわかった。

一方、(2)の「アメリカ英語とイギリス英語どちらを好むか（または得意か）」への回答では、「アメリカ英語」と答えた人の数は51名中24名（47%）にとどまり、「わからない」と答えた人の数が22名（43%）にものぼった（イギリス英語はわずか5名）。「わからない」と答えた22名のうち8名はその理由を書いている。以下は8名全員の回答であるが、アメリカ英語とイギリス英語の発音の違いに気づいていないか、意識が及んでいないことがわかる。

- 違いがあまり分からない
- これといって違いが分からないから
- 区別できないから（2名）
- アメリカ英語、イギリス英語の区別を気にしていない
- アメリカ英語とイギリス英語の相違点について考えたことや気にしたことがあまりないから
- イギリス英語を聞いたことがないから

- 発音よりもスピードや語数の方で聞きとれる量が変わると思うから

ここから窺えるのは、調査時点までにイギリス英語を聞く機会がほとんどなかった（もしくは、あってもそれがイギリス英語だと知らされなかった）ために、比較して答えることができなかったということである。残りの14名の原因は定かでないが、仮に彼らも同じような理由で「わからない」と答えていたとすれば、(1)で主に学習してきたのはアメリカ英語であるという結果は慎重に捉えるべきだろう。いずれにせよ、大学生がどのような発音を聞いて英語を学習してきたかについては、より詳細な調査が必要である。

4. 結論

本研究の研究課題（RQs）について次のことがわかった。まずRQ1（アメリカ英語とイギリス英語を聞いたとき、内容聴解の度合いに差はあるか）については、ないという結果が得られた。しかし、マテリアルやテスト形式が結果に大きな影響を及ぼした可能性があるため、結果の解釈については慎重になる必要がある。次にRQ2（聞きやすさに差はあるか）については、アメリカ英語の聞きやすさが有意に高いという結果が得られたものの、その平均は5段階中2.85と決して高くないことがわかった。最後にRQ3（内容理解の度合いと聞きやすさの間に相関関係はあるか）については、アメリカ英語とイギリス英語に関わらずテスト得点と聞きやすさの間に有意な相関関係がなかったことから、発音が聞きやすいからといって理解しやすいとは言えないことが明らかになった。

以上に加え、アンケートの結果から、多くの学生がアメリカ英語に偏って学習してきたことが示唆された。グローバル社会で活かせる実践的英語スキルを身につけさせるために、大学ではイギリス英語にも積極的に触れさせる必要があるだろう。大切なのは、今聞いている英語がどの方言なのか明確に学生に知らせることである。このことは発音学習への意識を高めるため

にも有効だろう。アメリカ英語と雖も、聞きやすさの平均が5段階中2.85と高くなかったのは、参加者の発音に関する関心の低さに起因するかもしれない。授業を通してその関心を高めるのは教師の役目である。様々な機会に、発音に関する意識を高めるような指導が必要である。

注

- 1 アメリカ英語とイギリス英語の発音の違いについては、金坂（2011）・小川（2009）・Celce-Murcia, Brinton, and Goodwin（2007）などを参照。
- 2 公式HPで確認できる地域ごとの加盟国の内訳は、アフリカ18か国（ナイジェリア、南アフリカなど）、アジア8か国（インド、パキスタンなど）、カリブ諸国と中南北アメリカ13か国（カナダ、ジャマイカなど）、ヨーロッパ3か国（キプロス、マルタ、イギリス）、太平洋地域11か国（オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニアなど）である。

引用文献

- Educational Testing Service (2009)『TOEICテスト新公式問題集Vol.4』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会・TOEIC運営委員会
- 大木俊英（2012）『ESL/EFLリスニングにおける発話速度の役割—『ことばの時間制御機構』に基づいた再考—』白鷗大学教育学部論集，6，91-112
- 小川直樹（2009）『イギリス英語でしゃべりたい！UK発音パーフェクトガイド』東京：研究社
- 門田修平・野呂忠司（編著）（2001）『英語リーディングの認知メカニズム』東京：くろしお出版
- 金坂慶子（2011）『イギリス英語パーフェクトリファレンス3000』東京：国際語学社
- 富田かおる・小栗裕子・河内千栄子（2011）『リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業を目指して』東京：大修館書店
- 矢野安剛・本名信行・木村松雄・木下正義（編）（2011）『英語教育政策—世界の言語教育政策論をめぐって（英語教育学体系 第2巻）』東京：大修館書店
- Bent, T., & Bradlow, A. R. (2003). The interlanguage speech intelligibility benefit. *Journal of Acoustical Society of America*, 114, 1600-1610.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., & Goodwin, G. M. (2007). *Teaching pronunciation: A reference for teachers of English to speakers of other languages*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2012). *English as a global language* (2nd Ed). Cambridge: Cambridge University Press.
- Tara, S., Yanagisawa, K., & Oshima, H. (2010). The influence of foreign accent on the listening comprehension by Japanese EFL learners. *ARELE (Annual Review of English Language*

大木俊英・金子夏実

Education in Japan), 21, 121-130.

Munro, M. J., & Derwing, T. M. (1995). Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in the speech of second language learners. *Language Learning*, 45, 73-97.